
うぐう

道造

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うぐう

【Nコード】

N4673BA

【作者名】

道造

【あらすじ】

KANONのギャグ。

ボクは横頬をテーブルにひっつかせながら、前を見る。

水瀬家――のダイニングで、軽い昼食を食べた後。

目の前に座っている祐一君の様子を見た。

いつもより少し多めに食べたのか、お茶をゆっくりと飲む。

少し熱めで出された麦茶を飲む顔が、少し赤い。

ボクは、それをじっと見ている。

ただ、なんとなく。

ゆるりとしたこの瞬間が好ましくて。

「うぐう」

ボクは嘆息する。

そして、祐一君はそれに目尻をぴくりと動かした。

「どうした、あゆ。たいやきの食いすぎでゲロでも吐いたか」

「吐いてないよっ！」

俺はダイニングテーブルで茶を楽しみながら、あゆに向かって言い返す。

「だって、今うぐうって言ったじゃねえか」

「これはただの口癖だよ」

「もういいかげん直せよ」

抵抗者を一刀両断し、手元の新聞を手繰り寄せる。
流れるような渋い仕草。

これでどんな異世界の婦女子も俺にメロメロだ。

「祐一、新聞の向きが上下逆」

隣から名雪のいらんツツコミが入る。

「あらあら、祐一さんは亭主関白ねえ」

だが、秋子さんの笑顔で問題なし。

ダイニングを見回すと、いつの間にか名雪と秋子さんも集まっていた。

「うぐう」

「うぐうじゃない」

新聞紙を丸め、ぽか、とあゆの頭に一撃かます。

「前から思ってたんだが、その口癖は直せ」

「うー、別に誰かに迷惑かけてるわけじゃないよ」

「なるほど。自分の権利だけは主張し、その責任はとうとうもしない似非個人主義者の豚野郎になりさがったか」

「そこまで言われる筋合いないし、そもそもこのケースと関係ないよ！」

ああいえばこういう。

「あのなあ、あゆ。別の地方の羽持った子なんか変な口癖言ったら一升瓶で殴られるんだぞ」

「それはただの虐待だよ。ていうか、それは普通に死ぬよ。あとそっちの話題振っちゃ駄目だよ」

今日のあゆはなかなか面白い三段返しをする。

多分、病気だ。

彼女を蘇生したクウトルーの旧支配者がいい感じに活動しているに違いない。

「祐一君、何か物凄く失礼な目で見られたというか、観察された気がしたけど気のせいかな」

「いや、すまん。栞の絵を見た後遺症だ」

「それじゃあ仕方ないね」

納得するあゆに、「お前も見たのかよ」というツツコミがしたかったが

あの件は話題にも触れたくないのでしない。

「……あれは、壊れる」

「お前も見ただのかよっ！」

絶妙な間をおいた合いの手に、俺は右隣へと顔を向けた。
しかし、この声は名雪じゃない。

「って、何で舞がいますかい」

はぐはぐ、もそもそ、とばかりに咀嚼する舞の姿があった。
舞は今日も元気に、自分のスタイルを維持すべくして、食をとっている。

ていうか、もう炊飯器のおひつが空じゃねえか。

「……お腹すいたから」

「お願いだから言葉と言葉のキャッチボールを試みてくれ」

「祐一が言っているいい言葉じゃないよ」

名雪はご飯をよそった茶碗を舞に渡している。

普段寝てばかりの割りに、意外と細かい心配りだ。

しかし、何故か俺に対しては冷たい。

あんまり起きないので「ヘイ、カーチスッ！」と叫びながら部屋へ乱入し

体中をプラスチックバットで殴打した朝の事をまだ恨んでるんだ。

「カーチスって誰」

「俺が知るわけないだろう」

不機嫌そうな名雪に、正直な気持ちを答えた。

なんとなく、格好いい名前を叫んでみたただけなのだ。

だが俺の真心は伝わらず、祐一なんて死ねばいいのに、という表情を名雪はした。

そこまで憎むこともないと思うが。

「ていうか、佐祐理さんはどうしたんだ」

「家の事情で忙しい。つまらないから来た」

「……まあ、来るのはいいけど」

俺は秋子さんが出してくれた紅茶をすすりながら、呟く。

しかし、相変わらずぶつ切りな会話だ。

あゆとは別な意味で矯正したほうがいいかもしれない。

前にも佐祐理さんとやったが、けっきょく二人で舞に萌え狂ってただけだ。

「……あと」

「あと？」

ようやく胃が満足したのか、茶碗の上に箸をそろえた。

すっ、と手を合わせて秋子さんに礼をした後。

どうということもなく、表現の深い無表情で言う。

「祐一のために、家庭の味を覚えにきた」

ええ女や。もう舞はこのままでええやんけ。

心の中が関西弁で満たされるとともに、抱きしめてやりたくなる。ていうか、場所が場所じゃなければ絶対に抱きしめているが。

「うぐう、ボクの事忘れられてるよ」

そういえば、あゆとか居た。

「もうどうでもいいよ」

「酷っ！　よくないよっ！」

もつとボクにかまってよ。

そんな言葉を体いっぱい表現するように、ジタバタと手足を動かして暴れる。

ただの、駄々っ子だ。

だが、それがいい。

「お母さん、祐一の目が爬虫類みたくギョロリと澱んでる」

「あらあら、いつもの事よ」

名雪はテーブルの食器をかいがいしく片付けながら、秋子さんに渡していた。

何故いつもはそういう行動が出来ないのだろう。

何故眠りにつくのだろう。

だが、答えの出ない禅問答を繰り返すぐらい、その疑問は坊主でも目指さない限り無為だ。

というか、俺が眠たくなってきた。

「……そうだな、この際ついでだ。舞や名雪に、あゆの口癖の矯正でも手伝ってもらおうか」

俺は背中を思いっきり反らした後、全身の力をだらりと抜いて椅子によりかかる。

飯食べた後だし、体中がぼかぼかして凄く眠たいのです。

「物凄くやる気なさそうだよ、祐一」

「お前はツツコミだけか、名雪」

目端で、ちよつと倦怠期のカップルばりに不機嫌そうな名雪をみる。

「そうだよ」

「……」

そんなストイックな名雪もいとおしい。

だが、それ以上にコイツら実はすげえ暇なんじゃないかと思った。
そんな日曜日。

「で、今から口癖を直そうと試みるわけだが」

自分の部屋へ戻っていく秋子さんを見送った後、
俺達はテーブルに四人で座り、のんびんだらりと会議を始める。

「次はどんな口癖がいい？」

「なくすんじゃないくて、変えるの!？」

「当たり前だろ」

断定した口調で述べる。

「お前、口癖がないキャラなんてこの世界で生存を認められると思
ってんのか」

「言ってることがあまりに酷すぎるよ、祐一君」

「と、いうわけで、俺が気に食わないという理不尽な理由だけで、口癖を変えてみたいと思う」

「自覚あるならやめてよ祐一君」

あゆが何か言っているが、舞は無視したように手をあげた。
ぶんぶん、と手が横に振られてなんだか可愛い。

「はちみつくまさん」

ああ、こんな意欲的な舞を見たのは久しぶりだ、と思いつつ名を呼ぶ。

「はい、舞」

「『へビー!』を語尾につけるといいと思う……」

「意味がわからないよ!」

意欲的でありながらも、少し心細げな口調でしゃべる舞。
可愛いじゃないか。

「よし、採用」

「なんでっ! 祐一君脳みそ腐ってるよ! ていうか絶対意見の内容自体は考慮してないよ!」

「確認しなくても腐ってるよ。ついでに耳は聞こえないから」

横から名雪のクールなツッコミが入った。

続けて、俺達を諷めようと口を挟む。

「せめて、もう少し考えてあげたらどうかかな?」

「ボクとしては考える以前に、候補に入れること自体が間違ってる
と言いたいけど」

「川澄さんが傷つくよ」

反論されてシュン、と落ち込んでいる舞を指差す名雪。
可哀想な舞。

「ボクはすでに満身創痍だよ！」

「私は……剣を捨てた私は、本当に弱いから。元気な月宮が傷つけばいいと思う」

「さりげなく酷いこと言ってるよ！」

顔をうつむかせたまま、悲しげに呟く舞。

ああ……俺はいつまでもお前を守ってやりたい。

「やっぱり耳聞こえてないよ祐一君、絶対！」

「だから、前からそうだってば」

名雪は目を細めて言う。

だおー、だおー、と言う声が聞こえてきそうだが、今日の名雪はクールだ。

これにより、俺のカーチス式起床論が世間に認められたと言っている。

「認めないよ。祐一の全てを今日は認めたくないだけ」

「……さっきから、俺の心にツツコムのは止めてくれないか。それとも口に出てるのか？」

どこぞの永遠行った主人公のように。

「そんなベタじゃない。目でわかるの。変なことを考えてるとき、瞳孔が濁ってるって香里が言ってたから」

「……」

俺は人間なのだろうか。
魚じゃねえんだぞ。

「人としての鮮度が落ちてるんじゃないかな」
「……」

もの凄く上手いことを言われたので、ツツコミとして傷ついた。
これからの人生について、色々考える。

AIRのアニメ化の事、劇場版のTVスポットが凄まじかった事、
それと比較されるアゴアニメの事。

KANONも京アニにアニメ化してもらって良かったな、という事。
クウトルーの旧支配者の事。

カーチスの事。

「——まあ、考えた結果。あゆの口癖はこれから『ヘビィ!』に決定な!」

「絶対に考えた結果じゃないよ! ボクの口癖について考えてよ」

「わかったよ、それも考えるよ」

「さっきまで何考えてたの!」

「俺にもわからん」

自信を持って告げる。

あゆがうるさいので、仕方なく俺は目を閉じて考える。
口癖のこと。

あゆのことを。

「ボクのこと……忘れてください」

あの日のこと。

辛くて、辛くて。

一瞬一瞬が後悔と、焦燥に駆られた日のこと。

忘れていた全てと、彼女と再び出会ってからのこと。

脳に眠っていた自分という存在の全てが、彼女を求めた日のこと。
全てが凝縮されたあの日のこと。

彼女の願いを、やっと叶えることが出来たのに。

その全てを失いかけた、あの日のこと。

情けない自分と、そんな俺の幸せを望んでくれた彼女の姿。

それが消えていく。

失せていってしまう。

目の前から、彼女の三つ目の願いとともに。

彼女の姿に逆光が刺さり、もう姿形を残した影しか見えなくなった。
そして、彼女は言った。最後の言葉を。

「ヘビィにな!」

ぐっ。

あゆのグローブに力がこもり、きゅっと音が鳴る。

その音だけが俺の耳に残り、彼女は舞い散る羽とともに消えていった。

後楽園ホールの通路からリングへと上っていく、年老いたチャンピオンのように。

熱いライトの光に身を任せ、その全てが色を変えていく。

コレが――ボクサー、だ。

「スゲエかっけえよなあ、あゆ」

「格好よくないよ!」

俺の目の前のチャンプはリングと拍手の渦にのみこまれていく。

マジで惚れそうだ。一生その光景は瞼にまで焼き付けられるだろう。

「お前、デンプシロールとか打てそうだよなあ。そのグローブもすっげえ格好いいし」

「打てないよっ! しかも関係ないよっ! これはて・ぶ・く・ろ、だよ!」

だんだん、とテーブルに手袋を叩きつける。

家の中でくらい手袋外せよお前。

「祐一君、真面目に考えてよ! さもないとタイヤキで殴るよ! タイヤキだよ!」

正直、もうどうでもよくなってきたなあ。
いいかげん飽きたのだ。

「やっぱり、お前には「うぐう」が似合ってるよ。もうこのままでもいいや」

適当に話を打ち切り、今日は早めに寝るとしよう。

「あらあら、あんまり苛めちゃ駄目ですよ」

「秋子さん」

俺のちょうど真上から、秋子さんが声をあげた。この人に後ろに立たれると、なんだか怖い。というか、さっきまで気配が感じられなかった。

「祐一さんは、甘やかすと苛めるが両極端ですねえ。この間も栞ちゃんを苛めたそうですし」

「……一応、どちらも愛情表現なんですけど」

俺はただ、彼女達の可愛さを追求したいだけだ。というか、フェチシズムを追求するために。

「そんなの、信じられないよ。目が濁りすぎだよ」

朝、マスコットバットで殴打した名雪が口を膨らませる。

お前の場合は純粹な悪意だ。

いいかげん自分で起きろよ。

「とりあえずジャムでも食べてもらいましょうか」

ごん。

俺の頭上からテーブルに落ちてくる、厚いガラス瓶に包まれたドロ口の脳髓。

オレンジ色の物。

「……」

この展開は何だろう。

ジャムさえ食べばなんでも落ちがつくとおもっているのか。
俺はそんなもの認めない。

秋子さんに訴えたい。

勇気を出して。

「秋子さん、なんでいつも俺にジャム食わせようとしていますか」

「大自然のおしおきです」

「いえ、それは思いつきり人工物だと思うんですが」

むしろ自然だったら、このアースがもれなく嫌いになれます。

「それと……自分の好きな人に、ジャムを食べて欲しいからですよ」

「……」

「理不尽ですか？」

「……いえ、その」

「祐一さんは、好きな人のためなら頑張れる人ですよね」

「……」

俺は食べた。

一瞬の躊躇もなく、反射的に。

そして、鋭角な鈍痛ともいえる。

そう、まるで頭に鈍器を振り下ろされた直後のように。

どろり、とした赤い世界が目の前に広がり。

俺は今日、この世界から消えてしまう事を知った。

「あ……祐一が死んだ」

名雪が的確に俺の様子を表した。

少し心配気味な声色が、やっと俺を許してくれたことを伝える。
そんな名雪が俺はいいとおしい。

いつの間にか逃げていた舞に気づかず、取り残されたことを知らないあゆと名雪の姿を見ながら。

ゆっくりと意識を無くしていく、ある晴れた冬の日。

後十二時間残していたはずの日曜日は、こうして終わりを遂げた。

「うぐう」

「だおー」

二人のよくわからない悲鳴とともに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4673ba/>

うぐう

2012年1月12日20時55分発行